



互いに近くで助け合う 「互近助」付き合いが もしもの時に大切

【市長】 てはいられない。そこで重要なのが「共助なんですね。その中でも私が特に必要と思うのは「近助」という概念です。

【市長】 近くの人が近くの人を助けるということですか?

【山村】 はい。更に「互い」という字をつけて「互近助」と言っています。みんなで助けるというと意外と無責任なんです。だから、自分の家と向こう三軒隣で「防災隣組」を作つて、災害発生時の安否確認の方法や、体の不自由な人が普段から考え方、訓練しておくことなどが大事です。「遠水は近火を救わず(※)」ということですね。

【市長】 なるほど。顔の見えるる

※遠水は近火を救わず…遠くのものは急場の役に立たないという意味のことわざ。

山村 武彦

防災システム研究所所長。
学生時代の新潟地震での支援活動を契機に防災の道を志し、世界250カ国以上の災害調査を実施。数多くの企業や自治体の防災・危機管理アドバイザーを務める傍ら、テレビ・マスコミなどでも防災意識の向上を目指し活躍中。



若い人の力を活用した 防災力の向上

【市長】 大学生だけでなく、中高生も被災地で活躍していますね。災害時だけでなく、日頃の地域の中での防災活動でも、その力が必要とされています。

【山村】 はい。全国的に自主防災会が設立され、沼津市でもほとんどの地域で、各自主防災会が積極的に防災活動に取り組んでいます。が、若い人にしかできない役割がありますね。例えば非常時を想定した訓練での「マンション高層階住人の安否確認」などです。

【市長】 高齢化社会がますます進む中で、若い人たちの力は更に大きくなっていますね。

【山村】 あとは、防災意識を家庭

に浸透させるのも若い人が行うと効果的なんです。防災活動に取り組んだ方がいいと近所の大人に言われても、なかなかピンと来ない。そこで福岡県福岡市では、中学生が学校で防災研修を受けた後、各家庭で防災会議を開くことを実験的に行ってみたんですね。

【市長】 どんな内容ですか?

【山村】 研修で学んだことの報告や、各家庭の備蓄や家具の固定状況の確認など、我が家の防災活動について話し合つてもらっています。

生徒はそれを学校で報告するのですが、始めてみると意外と効果があるんですよ。思春期の子だと、なかなか親と口も聞かないことが多いため、コミュニケーションが深まつた事例が多くありました。

【市長】 まさに一挙両得ですね。本市でも、地域の防災訓練に学生が積極的に参加し、地域の活動を盛り上げてくれています。

【山村】 防災活動は総力戦ですから、小さい時からこうした意識を持つことは非常に重要ですね。

【市長】 なるほど。

【山村】 防災の基本は、「自助」「公助」と言られています。自分の命は自分で守り、地域の皆さんで助け合い、行政にも助けてもらう。でも、いざ災害が発生すると一刻を争い行政の助けを待つ必要になるんです。

【市長】 なるほど。

【山村】 「防災の基本は、「自助」「公助」と言られています。自分の命は自分で守り、地域の皆さんで助け合い、行政にも助けてもらう。でも、いざ災害が発生すると一刻を争い行政の助けを待つ必要になるんです。

【市長】 連合自治会の自主防災会が主体となり、各自治会で、例えば自宅内での避難場所の確保や備蓄の必要性を伝えたり、地域で想定される被害状況の認識の共有や、いざ避難所を運営する必要がある時の役割分担などについて、話し合いを行つたりしています。

【山村】 素晴らしいです。これも一つの「互近助」の取り組みですね。

【市長】 本市は、慣習的に地域コミュニケーションで活動するということが根付いていて、ご近所付き合いや隣組といったものが残っています。こうしたものの大切にしながら、例えば地域の行事の時などで、防災をテーマに出し物などをを行うことで積極的に意識付けを行つていかたらいですね。

【山村】 この度、「互近助さん」の歌(※)という防災活動を啓発する歌を作りましたので、ぜひそういう場を活用して、集まつた皆さんで歌つて見て下さいね。

【市長】 先生が作詞されたんですか。親しみやすく、メッセージも伝わりやすい歌ですね。ぜひ、活用させて頂きます。

※「互近助さんの歌」は、防災システム研究所ホームページ(<http://www.bo-sai.co.jp/gokinjyosannouta.htm>)で聴くことができます。

